

森の名手シリーズ 42

名人 寺澤 俊二 (72)
岐阜県恵那市

聞き手 踏込 龍生
岐阜県立飛騨高山高等学校 1 年

平成 24 年取材

「森の名手名人」とは、森に関わる仕事や地域生活に染み込んだ営みのうち、優れた技をもつてその業を極め、他の模範となつていく達人で、毎年、全国で約 100 名が認定されています。岐阜県においては、現在、47 名の「森の名手名人」が認定されています。

この「森の名手名人」を「森の聞き書き甲子園」に参加した高校生が「聞き書き取材」をしたものの中から誌面の関係上、要点を抜粋したものです。なお、年齢、住所、学年は取材当時のものです。



道づくり

山と人生の道づくり

1. 道づくりで山の環境を守る

初めて作業道を作ったのは、11 年くらい前かな。県の「作業道研修」を受けてな、道を作った。今の時代、山の中で車で入れんと仕事ならんし、手入れもしやすいで。手入れをしないと山に日光が入らんわけよ。陽が入らんちゅうと、山全体が露出しちゃうわけ。土が下まで流れ出ちゃうつていうこと。草が生えとらんと、水が流れるわけ。そうすると上の方が崩れる。木は倒れるわけよ。倒れると根っこが上にあがつてきちゃう。押さえる勢いと水の勢いで崩れてくるわけよ。雪でも同じことが言えるわけよ。雪の場合は温度がプラスになるとそういうことが起こるわけ。融雪注意つて言うけど、温度が 3、4 度になると雨が木に凍りついて、凍りついたところに雪が乗ってくるわけ、そうすると、木が倒れてくる。そこにキツキが穴をあけた木があると、それで太い

木でもボキンと折れてしまふ。それをきつかけに山全体が崩れてくることもある。山崩れして下流に行くのが一番の災害の大きいことやで。山崩れは雨の場合によく起きるし、林道を作つていくときに山崩れの起きんような方法でいかなかん。

地域には「大栗林業クラブ」ちゅうのがあつて、森林組合から委託を受けて、その人たちと緒に、近くの地域の山を持つて人のとこへ行つて、間伐をやつたりいろいろ活動はしてる。

2. 道づくりは工夫が大切

山のどこを切り開くかどうやって決めとるかちゅうと、道はヘアピンカーブみたいに回つて上にいくんやが、その下の道路と折り返した上の道路との間隔が 40m から 50m くらいになるようにしてる。木は将来 20m になるもんで、それをパタンと倒して引つ張り出す作業をする

き、ほとんどが道路まで出てくるちゅうと、いい間隔なんよ。上の方へ倒すと上の道へ出るし、下の方へ倒すと下の道へ出るもんで。道の幅は 3m から 3m 50 くらいかな。

作つた道が崩れるとなかなかつながらないもんで。崩れてしまふと道が通れんようになつちゃうから、また掘るか、どつかで余つた土をダンブで運んできて入れるかなければいけない。そういうことのないようにするにはどうしたらいいかを考えて道を作つたり、排水をしたりするわけよ。だから、石のブロックを積むとか、石を並べて頑丈に作るかな。そのときにビニールパイプの太い排水管を入れて水を流し出すと、一番いいわな。排水の処理が第一や。作つるときに、水がたくさん出てきた場合は、木を敷いたり、石を敷き詰めたつて、その上に道を作つていく。それと、大きな石が正面にドーンと出ているところは、その石をよけて、石の上へあがるか遠回りして行くように道を変

えて作る。それも一つのポイントやで。作業のしやすいように道路を変更しながら作てく。急な勾配のところを、一つカーブさせて上へ行く。1 回道を作っちゃうと、次は何年か先でもちゅうと直すだけで通れるようになる。

3. 安全に作業をするために

チェーンソーは 1 日に 1 回研いで毎日使う。燃料は 1 日 3 れか、4 れくらいいる。チェーンソーで伐ると木のくずが出るわけよ。それが機械の中へ入るもんで、それをコンプレッサーでたまにきれいに掃除せんと、調子が悪うなる。

ワイヤーは木を引つ張つたり、つたりいろいろするわけよ。ワイヤーは傷がついて切れかけたやつは使つちやいかな。使つたときに切れて頭の上へ落ちたり、積むときに切れて、機械が壊れたりするとかんで。ワイヤーは常に傷のない新しいのを使うのがポイントやわな。安全面が一番大切やで。

木を引きだす「引つ張りだこ」ちゅうのがある。300 kg くらいのものを引く力が出るわけ。で、長さが 40m くらいあるワイヤーをつないで、引き寄せる。けど運び出すのがちよつとずつしかできん。今はユニボ(バックホー)にワイヤーがついて、滑車がついて、木を巻き上げるようなふうだわな。

キャタピラがついたのは、木を運搬する機械。あれにもワイヤーがついて引つ張れる。下りなら 0・8 から 1 立方メートルまで積めるのな。あまり急なところは滑るで危ないけどな。運搬機は、道のないところでも平らなら、山の中まで入つていけるで非常に便利だに。ちよつとした川のようなところは、木を並べて橋を作つて、多少軟らかくてもキャタピラがあるもんで動けるし。大事に使つてとるで。

後はユニボだ。今のは 2 台目でキャタピラ

がゴムだわな、初めは鉄だつたけどな。鉄の方が山にはむいてる。鉄の方が滑らんてな。ユニボの場合は常に水平にして仕事をする。そうすると力が出るし、危ないのてな。技術につながらるのは、安全にやることなな。



引つ張りだこを使って木を引き出す

4. 植えて・育てて・利用する 生きた森づくり

手入れには枝打ちというもんがある。高いところの枝打ちは、梯子を使ってやる。枝打ちは柱が 1 本とれるくらいの範囲をやるから、大体 4m 位の高さまでだもんで、そのくらいの高さがありがたいわけよ。それを 1 本の木に対して 2 回から 3 回やるわけよ。初めは 15 年くらいでやつて、それから 25 年くらいでやつて、その後は 35 年くらいの 3 回の計画でやるわけよ。主にヒノキをやるわな。両刃の枝打ち鉋で、下からと上からとで節はきれいに落として、肉が巻き込むようにとるわけよ。家の内装材に使うような場合は、やつぱり手入れをしかりして、節目が無くて木の目が細かい方が、丈夫で美しく見えるわけよ。

私の森づくりの目安つていうのは「植えて、育てて、伐つて、利用する」という、そういう生きた森づくりが基本。そうせんと手入れ

のものも回らんし。木は、1 回植えて 20 年、50 年くらいたんと大きくならんもんで、長い目でいくというのがよ。

5. 共同経営 山の仕事も助け合い

とにかく木材の単価が上がつてこない、どうしようもない。木は国が補助してやれんから、100% 自由貿易なんや。それで輸入品がどんどん入つてきて、その輸入と同じような値で日本の国産材も売らうとするもんで、値が安くなる。多少高くしたいけど、外材の基本ベアに合せて日本の結果も変わつてくるわけよ。それに打ち勝つだけのいいものを作つていかんと、需要が伸びんわな。

それには「共同化して、コストを安くして、いいものを作る」ことに心がけておる。一つのブロック、一つの仕事をすることで 30 町歩くらい(約 30 ヘクタール)の規模でないと。機械を買つても、人を頼んでてやつても、わずかにんだけの山にどれくらい立派な道を作つても多くの方々の山へ続いたら何にもならんわ。そういう意味で、30 町歩の範囲を A さんも B さんも C さんも、同じ機械や道を利用してやるようなことじゃないと駄目なわけよ。国の政策もそういう風になつてかんと。それに対してはどんだけの補助金出しますよと。その代わり「伐つた木を山に捨てとつちやあかんわけよ。利用間伐ちゅうて、出してきて、柱にしたり、材料にしたりして市場へ売れなさい」と、ルールを決めて、システム化しないよ。

「こういう風に共同で林業経営に当たるといふことをこの将来は第ににする。個人の力ではどうにもならん。共同で施設をして、森づくりを励むつちゅうことやわね。作つた道は使つて、機械も使つて、何もかも使つて運営していくと一番ええのな。機械も使う、道も使う、人間も

働く。そういう循環で、だれもが生活できて、また後継者もできて、成果も現れるようになるわな。

6. 未来へつなぐ道 山は我が人生

木材の価格が低迷してるもんで、予定通りに木を売つて、いろいろ買つてか生活するとか、そういうことが全くなきようになつちやうとるもんで、そういうことが一番つらいわな。1 年や 2 年でそういうことになりやあきらめもつくけど、何せ 50 年も前からやつたことが、だんだん駄目になつていくちゅうことやもんで、やつぱしつらいわな。

怪我をしたこともあるし。チェーンソーで伐つた木が回つてきて、背中当たつて、背骨が折れて入院になつて、1 ヶ月くらいかかったこともあつたな。やけどだんだん慎重になつてくるし、年とつてきたもんで、無理はできんようになつたけど、怪我してもまたやる気が起きるちゅうことは、山が好きだちゅうことやで。

将来はこれもやつぱり道をつけてよ、木を出すようにしたいとは思つてる。道をつけると山がものすごく良くなる。きれいになる。素晴らしい価値の出るもんだに、道づくりつちゅうもんは。どんな道を作るにしてもよ、人生の道だわな。道筋を作ることは初めはだれでも苦労するわ。一番初めに道を作る人は苦労するけど後から通つて行く人は楽だわの。ただ、年をとつてくるもんで後継者に渡しての、一生懸命やつてもらいたいちゅうことも一つお願いだわ。

山が好きだで熱心になれる。怪我をしても失敗を乗り越えても、挑戦して、木を植えて育てたいと、そういうことは思つてる。山は我が人生だ。



寺澤さんが切り開いた道

名人 寺澤 俊二さんのプロフィール

●生年月日…昭和 15 年 3 月 5 日生まれ

●職業…農林業

昭和 33 年以来、先代から承継した約 20 ha の山林に植栽や保育を行い、80% を人工林にして育ててきた。

林業の効率化や低コスト化を図るために、早くからバックホウ等の機械を導入し、自らの作業で 1000m 以上の作業道を開設して、年間 100 ～ 120 立方メートルの間伐材を「山岡木の駅」へ出荷しているほか、「大栗林業クラブ」を結成し、恵那森林組合と連携して、地域の間伐等を進めている。

平成 18 年から恵那市の「恵那の森づくり推進委員会」の委員を務め、森林づくりへの提言や木工工作材料の提供など、恵那市の進める林業施策の推進に協力している。

平成 24 年には、岐阜県林業経営コンクールの最優秀を受賞し、現在も地域の森林づくりに活躍中である。

なお、聞き手の踏込龍生さんは、現在岐阜県森林組合連合会岐阜林産物共販所で活躍中である。

※原本は長文のため、文章の一部を割愛しています。

【森の名手・名人編集担当 公益社団法人 岐阜県緑化推進委員会 専務理事 黒崎隆司】